

# 日本動物看護学会 第2回大会

1996年6月29日（土）  
慶應義塾大学

# 日本動物看護学会第2回大会

## 会期

1996年6月29日(土) 15:00 ~ 17:30

## 会場

慶應義塾大学三田キャンパス 図書館AVホール

## 参加費

正会員	非会員	
3000円	5000円	(年会費3000円で当日の入会も可能です)

## 懇親会

18:00より西校舎・山食にて行います。懇親会費は2000円です。  
多くの分野で活動する皆さんの気軽な意見の交換の場をつくれればと思っています。  
会員、非会員を問わずお気軽にご参加ください。  
懇親会の参加申し込みと参加費のお支払いは、大会受付にて申し受けています。

## 学会連絡先

学会事務局： 桜井動物病院内 電話 03-3652-9101  
ファックス 03-3656-9288

大会連絡先： 慶應義塾大学心理学研究室動物実験棟  
(当日) 電話 03-5443-3896  
図書館AVホール 電話 03-3453-4511(内線2539)  
4521 (ダイアルイン)  
山食 電話 03-3453-4511(内線2488)  
4521 (ダイアルイン)  
03-3453-5971 (直通)

大会日程

15 : 00

会長あいさつ

日本動物看護学会会長 今道 友則

15 : 10～16 : 00

教育講演

「動物の心をどう考えるか」

—動物看護学は飼い主の擬人観とどうつきあっていくべきか—

慶應義塾大学教授 渡辺 茂

16 : 00～17 : 30

シンポジウム

「動物看護師の様々な職域からのレポート」

座長 : 大和田一雄(山形大学医学部)・幅田慶子(センターヴィル動物病院)

動物園からI  
動物園からII  
産業動物において  
野生動物調査から  
実験動物管理において  
動物病院から

行川アイランド  
江戸川区自然動物園  
あさひ動物病院  
都市のタヌキ研究会  
(株)アニマルケア  
さとう動物病院

高山正美  
河村早苗  
甲山譲児  
富澤保浩  
森岡一憲  
三浦祐美子

18 : 00～20 : 00

懇親会

(西校舎・山食)

# 会長あいさつ

日本動物看護学会会長 今道 友則

昨年12月に本学会が発足して半年が経過し、ここに第2回総会を開催するに至りましたことを、会員皆様と共にお喜びする次第であります。

我々は動物看護学会を確立して、動物看護師の学問的基盤を作ると共に、動物園の飼育技術者、実験動物技術者、畜産技術者や獣医師にとっても必要な動物看護学にしなければならないと考えております。

地球上に等しく生をうけた人と動物の命を相互に尊重して共存する世界を作ることを念頭におき、動物看護学の立場では、動物愛護精神にもとづいて動物の欲求・快・不快等の各種の心理状態を動物の行動の細やかな変化によって察知して適切に対応する方途を経験的・技術的・実務的に整理すること、疾病や傷害の診察・治療の補助技術の標準化、疾患動物の看護、幼若動物・妊娠動物・老齢動物等の介護の方法；畜主の動物飼育取り扱いの技術的・精神的指導等の多くの問題について各種動物に共通する総論的整理と動物種別その他の各論的問題の整理を行うこと等が必要と思われます。

今回は、シンポジウムのような形式で、動物看護に関与しておられる各方面のからの演者にご講演いただき、動物看護学がカバーすべき分野・範囲・未知の問題等について討議し、理解を深め、今後の動物看護学の発展を画りたいと思います。会員の活発な討論を期待致します。

# 「動物の心をどう考えるか」

—動物看護学は飼い主の擬人観とどうつきあっていくべきか—

渡辺茂（慶應義塾大学・動物心理学）

## 1) 擬人観の起源

動物の行動を人間の行動に模して考える擬人観の起源は大変に古いと考えられる。洋の東西を問わず、民間伝承には多くの擬人化された動物たちが登場する。このようなものの見方はなにも古代の人間に限ったわけではなく、現代人も自動車やコンピュータなどのあきらかに生物でないとわかっているものにたいして「今日は機嫌が悪い」「今日はよく働いてくれた」といったものの言い方をする。これらのことは擬人的なものの見方は人間のもつ自然なものの見方であることを示している。生物ですらないものにまで擬人的な解釈をくだしていることは、擬人観が人間にとって如何に「居心地のよい」解釈であることを示しているだろう。

## 2) 人間の心を研究する心理学は動物をどう扱ってきたか

では、人間の心をその研究対象とする心理学では動物はどうあつかわれてきただろう。もし、人間の心と動物の心がまったく違うものだったら、心理学が動物の研究をしてもナンセンスなことになる。また、まったく同じものだとしたらわざわざ動物の心の研究をする必要もない。心理学が動物研究をおこなうのは、人間とそれ以外の動物に普遍的に見られる機能と、人間にだけみられる機能を比較してゆくことによって、人間の心の発生を研究しようとするからである。

実際、このような動物の心の研究はダーキンの弟子であったロマネスに端を発している。しかし、ロマネスの研究方法がまさに擬人観にもとづくのもだったのである。つまり、私たちは自分たち人間の心は理解できても動物の心を直接覗くことはできないので、動物と人間が同じような行動をした時には、心も類似したものであろうと類推するわけである。人間の心を既知のものとして、動物の心をそこから探ろうとしたわけである。

ところが、その後の心理学はできるだけ簡素な原理によって動物や人間の行動を説明しようということになっていった。つまり、見方が逆転して、単純な系である動物研究から一般理論を導出し、それを人間にあてはめようとするようになったのである。この場合も人間と動物の連続性がその前提になっていることをいうまでもないが、これは、いわば人間の擬動物観である。

しかし、その後、グリフィンら動物行動学者たちの「作業仮説としての動物の意識」という問題提起もあり、現在の時代精神としては人間以外の動物に人間類似の心を認めることは心理学者にとってそれほど抵抗がないものになっているであろう。

## 3) コンパニオン・アニマルにおける擬人観の意義

つぎに飼い主がコンパニオン・アニマルをどのように見ているかを考えよう。ここではコンパニオン・アニマルの存在意義を改めて論じることはしないが、コンパニオン・アニマルがコンパニオン・アニマルとして機能するためには飼い主の擬人観が大きな役割を果たしていることはいうまでもない。つまりコンパニオン・アニマルは共にくらす人間のなかまの代替なので、代替として機能するためには当然人間を模した見方が

なくてはならない。このことは、コンパニオン・アニマルが実験動物や経済動物と全く異なる点である。

むしろ、飼い主とコンパニオン・アニマルの間では言語による人間同士のコミュニケーションより意志伝達のはるかにあいまいなため、飼い主の自由な解釈が可能であり、かえってより都合のよい解釈のできる仲間とみることにもできる。

もし、擬人観が科学として正しくないとしても、飼い主の擬人観を否定してしまっ  
てはコンパニオン・アニマルとしての意義は半減すると考えられる。コンパニオン・ア  
ニマルの社会的機能を考えれば、飼い主の擬人観はむしろ積極的な価値をもつものとし  
て評価されなくてはならないだろう。

#### 4) 科学としての動物看護学は擬人観とどうつきあうべきか

とはいえ、動物看護の立場からは、飼い主の擬人観を無制限に受け入れることは  
できない。第一にそれはコンパニオン・アニマルそれ自体にとって有害な場合があるか  
らである。飼い主の無原則的な擬人観から生まれる動物のあつかいは、人間の代替で  
あるコンパニオン・アニマルにとっては生態環境を無視したものになりがちである。こ  
れらの問題は、飼い主の動物の生態にたいする理解を深めることによって適切に指導さ  
れなくてはならない。第2にアルファ・メール症候群にみられるような間違った育て方  
による問題行動の発現がある。これは、場合によっては飼い主とコンパニオン・アニマ  
ルの間の問題にとどまらず、第3者をももきこむ恐れがあり、飼い主への適切な啓蒙活  
動が必要になる。

もちろん、飼い主のコンパニオン・アニマルに対する擬人観を非科学的として全面  
否定するところが正しい対処ではなく、飼い主がコンパニオン・アニマルにいわば「美し  
い誤解」をもったままで、飼い主、コンパニオン・アニマル双方に疾病や問題行動がな  
いようにコントロールするのが、動物看護学に期待されることであろう。

## 「動物看護師の様々な職域からのレポート」

動物園からI

行川アイランド

高山正美

動物園では、飼育担当者としての役割の中に看護も含まれています。毎日の飼育から動物の病気の予防、発見、治療を獣医師と協力しながら、動物たちが健全な生活をおくれるように努めています。

私の働く動物園は、鳥のショーを中心として運営しているので、ショーはとても重要です。ホロホロチョウという鳥のショーでは、ほとんど飛ばない鳥が空を飛んでしまうというショーです。調教をすることにより、本来の習性と異なることをすることになっても、動物の負担が少しでも軽くなるように気をつけています。

また、シーズンにより来園者の人数が異なり、動物にとってダメージをうける場合があります。来園者が多い時、人間嫌いの鳥は、羽根をぼろぼろにしてしまったり、同居しているのをいじめたりしてしまうのです。そういう場合は、餌のバランスを変えたり、隠れる場所を増やしたりします。

しかし、人間にとっても動物による危険性がないわけではありません。動物とふれあうことで、アニマルセラピーといわれる効果がえられますが、人畜共通伝染病にうつるきっかけになる場合があります。動物舎には、消毒槽を設置し、他の場所に汚物をもっていかないようにしたり、動物を触った人達には、手洗をするようにしてもらったりしています。

そして、出来るだけ動物たちが健康を維持できるように努めていますが、繁殖期に起こる闘争は、強い個体が徹底的に弱い個体を痛め付けます。以前インコ同士の争いでは、生命の危機までは至らなかったのですが、生きていくためのリハビリをしても、下くちばしがなくなってしまったために上くちばしが伸び過ぎてしまうという結果になってしまったこともあります。

種類により体の構造が違うので、動物に関する知識を高め、毎日の観察したことを記録し、動物園同士で情報を交換し、動物たちのケアにつながるような飼育環境づくりや飼育管理を努めています。

## 『ふれあいコーナー』における動物の管理

近年、動物園は従来から掲げられている、1.レクリエーション 2.社会教育 3.調査研究 4.自然保護という4つの役割から、積極的に種の保存を図り、自然環境の保全の重要性を訴える環境教育の場としての役割に変わりつつある。

この大きな2つの役割は動物園で飼育されている動物たちが、本来の姿の美しさや生き生きとした行動が保たれた健康な状態であってこそはたされるものである。しかし、野生動物を限られたスペースと飼料そして様々なストレスがかかるなかで健康な状態に保っておくのは大変なことである。さらに、『こどもどうぶつえん』や『ふれあいコーナー』といわれる場で、来園者とのコンタクトを目的として飼育されている動物たち（主にヤギ、ヒツジ、ウサギ、モルモット、チャボなどの家畜）を健康な状態に保ち続けるのはある意味では野生動物を管理すること以上に手間のかかることである。

コンタクトコーナーは、来園者が動物を間近で見たり、触ったり、抱いたり、匂を嗅いだりと五感による全身体的な体験が出来る場である。しかし、動物の立場から考えればそのすべてがストレスとなる、したがって管理するスタッフは、いかにそのストレスを緩和し心身とものアフターケアに努められるかが重要であると考えられる。

- ・来園者に動物がよく世話を受けているという感じと確信を与えられるような管理を心掛ける
- ・動物に適度な馴致をすることによりストレスを最小限にとどめる
- ・来園者が動物に対して正しく理解・評価し動物が尊重される場となるよう、スタッフ一人一人の言葉かけによって普及する

以上、当園のコンタクトコーナーのスタッフが日常心掛けとしていることである。



## 産業動物の看護

日本において、経済行為として飼育されている動物の種類は乳牛、肉牛、肥育豚、繁殖豚、緬山羊、鶏等が主たるものである。昭和20年代、戦後の逼迫した食糧事情を改善するたね農業災害補償法が制定され、国内農業を国を挙げてバックアップする体制が整った。以後、経済の発展にともない第一次産業は二次、三次産業に圧迫され、畜産農家一戸当たりの経営規模は拡大しつつあるものの、農家戸数は減少の一途をたどっている。特に都市近郊畜産農家においては、世帯主の高齢化、後継者不足、住宅開発に伴う環境問題、農家自身の不動産業への転業などにより急速にその数を減らしている。

産業動物獣医師の役割は、家畜の健康管理を通して畜産農家の収益を最大限に高める事にあるが、対象となる動物種によってかかわり方は異なる。豚、緬山羊、鶏はワクチネーション等による群管理が目的となるし、牛では群管理と併に個体診療が伴う。

即ち、個体単価（その家畜が産み出す価値）の高いもののみ個体診療の要請があり、獣医師の治療費に満たない価値のものは淘汰の対象となる。経済動物である以上仕方のないことであるが、愛玩動物と決定的に違う点である。従って、我々が最も頻繁に予防、治療、看護に出向く対象は乳用牛である。

乳用牛は、当然の事ながら、毎年分娩を繰り返すことによって大量の乳を産出する。受胎にかかわる繁殖障害、人工受精、分娩にかかわる周産期疾病、栄養管理失宜に由来する代謝病、蹄病など疾病の種類も多く、管理には細かい配慮を要求される。乳用牛の管理、看護は基本的には飼い主が行うが、体重600kgから800kgにもなる牛の管理にはかなりの熟練が要求される。

当院では、畜産農家への往診には、V.T.か、勤務医を同行することが多い。特に大規模牧場では住まいと牧場が離れていることが多く、処置を円滑に進めるために、補助を必要とすることが多い。

## 野生動物調査における動物看護とは？

近年野生動物の調査研究（特に哺乳類）に関心を寄せる人が多くなり、職業研究者や大学生以外にもいろいろな人達はその調査活動に携わる様になってきている。また、その情報もオープンになり学会の様な組織以外でも多くの人達がフィールドで活躍している。しかしそれに伴いその調査研究自体のありかた、特にその方法論については諸問題が発生してきている。

今回、我々が神奈川県川崎市において実施しているタヌキ調査を例に、その諸問題と、その諸問題において動物看護の考え方をどの様に取り込んでいけばよいのかを考えてみたい。

近年野生下における哺乳類の調査研究には電波発信機を利用したラジオテレメトリー法が広く普及している。このラジオテレメトリー法の普及により多くの種や地域個体群において、その行動圏や生活史が明らかになってきた。当初はバッテリー等、物理的な問題で大型種のクマ、シカ等がその中心であったが技術の進歩によってより小型化、軽量化がなされ、最近では大型、中型の哺乳類のみならずネズミ、コウモリ等の小型哺乳類、ツル、ワシタカ等の鳥類からウミガメ、サケの様な海洋生物、さらにはミズスマシの様な水生昆虫に至までその対象範囲も多様化してきている。

また、発信機から送信されてくる電波の受信方法も従来の間人がアンテナを手を持って受信する方法から宇宙衛星を利用する方法まで多様化してきた。そして、得られたデータは多くの事を物語り、今後の人類の活動においても多くの情報を提供している。

さて、そこで先に書いた調査方法における諸問題の話しになるのだが、発信機を利用するラジオテレメトリー法が広く普及していると言う事は、それだけ多くの野生動物が捕獲され発信機を装着させられていると言う事である。発信機を装着するためには当然、罠（ごく希に麻酔銃が使用される）による捕獲、そして麻酔による不動化が前処置として行なわれる。もちろん全ての種において罠や麻酔が使用される訳ではないが、一時的にせよ人間に拘束されるというストレスには変わりはない。罠によって捕獲された動物の多くは逃れようと罠の中で暴れ歯や爪を痛めてしまう、場合によってはこれが原因で摂餌行動に支障を来す可能性もある。また、不動化における麻酔薬の使用に関しても通常の様個体の体重から投与量を求める事が困難である場合が多く（特に大型獣）、そのため一定量の麻酔薬の複数回投与が行われる。当然、麻酔薬の過剰投与の危険性は高くなる。

このような問題が起きる原因は、これら一連の作業が通常野外で行われるからである。最近ではバイオプシーを導入した研究や、発信機を腹腔内に入れる方法もあり野外において外科処置も行われている。これらの作業を経て発信機が装着されるのだが、体のサイズによっては装着されずに放逐される場合もある。また装着した発信機の回収は困難で、電池寿命が尽きても再捕獲できず死亡するまで発信機を装着したままの場合が大多数である。しかし発信機の装着法も工夫され、最近では装着個体の成長にあわせて発信機の固定バンドが伸びる物や、逆に剃毛した表皮に接着剤で直接発信機を装着し、体毛が成長すると発信機が脱落する方法も利用されている。

この様に調査方法は進歩しているのだが、これらの作業に必要なハンドリング等については特に決まった手法は無く、あくまで実施者個人の経験に基づいて行われている。このあたりに関してはトラブル回避のためにも何らかのガイドラインの作製が必要であると思われる。

最近では野生の動物に対して発信機等、人為的なストレスを与える調査に対して西洋的なアニマル・ライトの発想から異義を唱える声もあり、特に貴重種の取り扱いに対しては“研究者の興味本意の調査のために貴重な生物に過度のストレスが加えられている”といった批判の声もある。調査する側も、異議を唱える側も野生動物の保護管理に関心がある訳なのだから、この辺に動物看護の考え方を導入したガイドラインがあれば両者がもっと歩み寄れるのではないだろうか。そのためにも野生動物調査における動物看護の具体的な考え方の構築が急がれると思う。

## 実験動物管理下における動物看護

我々は実験施設において繁殖育成から老齢に至るまでの犬の総合的な飼育管理を行っている。動物飼育管理下における看護に対する考え方および実際について、日常実施している作業の順を項目別に述べる。

### 1. 飼育管理体制の特徴

動物飼育に関する基本的な考え方は、日常および定期的な健康管理、すなわち疾病予防の徹底である。我々の動物飼育の特徴は、動物に関する知識や技術を持った経験者が確立した管理方法や体制を持っていることから、動物に対する観察眼をもち、初期症状を捕らえることできる、症状が疑われたとき発病以前の経歴を定期検査および日常観察記録あるいは既往症をカルテによって知ることができる、長期治療や看護を組織的かつ確実にできることなどがあげられる。

### 2. 異常の発見

異常発見の機会には、日常の観察、血液や血清生化学検査、既往歴動物に対する要注意観察等によることが多い。日常の観察では、朝の点検（飼育やケージ洗浄開始前）、清掃中、夕方の点検（帰宅前）の3回で、人に対する反応、活動、食欲、糞や尿の異常（下痢、軟便、出血など）、外傷の有無などについて詳細なチェックを行う。また、定期採決時には人が動物の体に十分に触れ、とりわけ既往歴のある個体に関しては、詳細な触診や観察が複数の管理者によって行われている。

血液、血清生化学検査は、定期的には1個体あたり3カ月に1回行っている。検査結果は、施設で作製した標準値との照合、個体の健康記録および動物の観察結果を合わせて、異常の検出やその後の対応方法を定めるために用いる。

### 3. 要観察動物への対応

#### 1) 栄養管理および老齢犬

食欲減少や老齢個体の落歯などによって餌をたべられないなどの状態がみられる個体に対しては、ふやかした固形飼料、嗜好性を増やうな犬用人工乳の添加飼料、人工乳のみを与えて、様子を観察する。食べないときは、口に餌をいれて反応をみるなど、状態を把握

する。老齢犬では、座創の発生などに注意しながら、衛生管理等の処置をおこなう。

## 2) 検査体制

早期および精密な診断として、X線による単純および造影撮影、特殊な血清生化学検査、細菌検査などを行い、治療と看護の焦点を明確にする。

## 3) 体表面の疾患

外傷、皮膚炎などは、患部に必要と判断された回数の薬物塗布や保護をする。

## 4) 内科的疾患および温存療法

内科的な疾患と判断された場合や動物の状態によっては、必要と判断した間隔で血液および血清生化学検査や尿検査などと詳細な観察を行いながら、治療や看護の方針を決める。

## 5) 外科的疾患

手術後は、特別な看護体制を組んで詳細な予後観察を行いながら治療を行う。

## 4. 治療および看護の基本的な考え方

治療および看護の基本的な考え方は、苦痛の緩和、除去である。原則として、安楽死は行わない。

## 5. 飼育管理者の質的向上

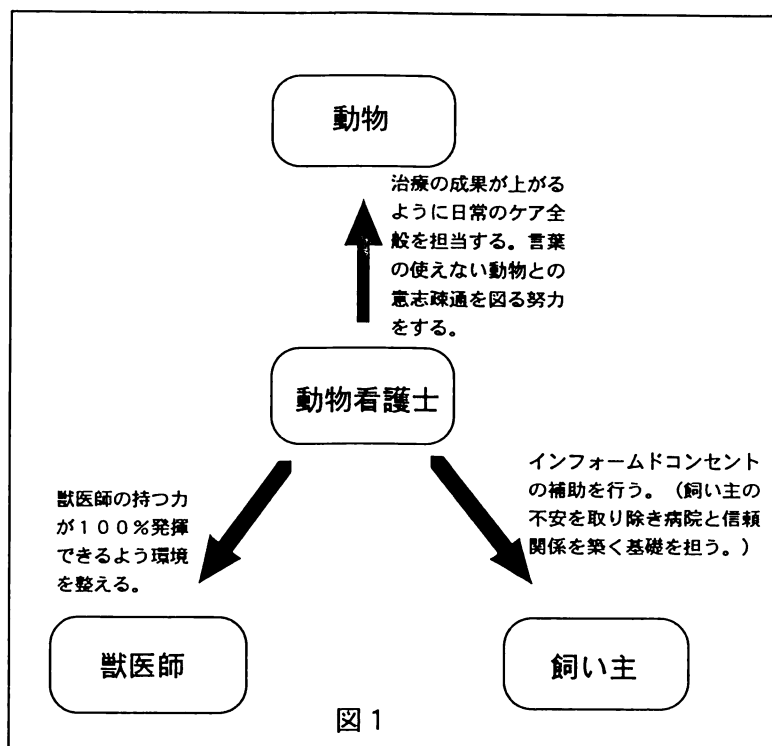
動物管理は、実験動物技術資格者によって実施されている。日常の動物の取り扱い、死亡犬の解剖や各種検査などによる生理・解剖学的知識や基礎技術の習得と同時に、看護経験を重ねながら管理者の質的向上を計っている。とくに、看護は複数の管理者がチームを組んで客観的な判断ができるように努めている。

皆さんは動物病院のイメージをどのようにとらえていらっしゃるでしょうか。全く来院なつさった経験がないと、きっと人間の病院からそのイメージを拾っていくのではないのでしょうか。

動物病院は、その多くがまだ分科されておらず、内科、外科、産科、歯科心臓外科まで同一の獣医師が一つの診察室で診察を行うことがほとんどです。従って、獣医師の補助をする動物看護師は、やはりすべての診療科目について補助を行わないといけませんし、同時に、診察室、手術室、入院室、受け付けなどすべての部屋の各業務を担当することになります。そして、その中における人間関係（図1）の上で仕事をしていることとなります。

私たちが仕事をしている現場は、医療活動の現場であると同時に経済活動の場でもあるというのが現実です。この二つの要素を常に頭に入れ、かつ、獣医師とのディスカッションの中で与えられた仕事の領域がどこまでであるかを確認しながら日々の仕事に努力しているわけです。

本日は、私が勤務する病院の各部屋ごとに、具体的にどのような仕事をしているか、という点に焦点を当てて、スライドを使ってご説明したいと思います。



# 三田キャンパス内案内図

